

## 第1編 沿

昭和29年4月29日谷村町、宝村、禾生村、盛里村及び東桂村の1町4ヶ村が合併、県下第4番目の市として誕生し、一年有余を経た我が都留市は郡内に於ける政治、経済、文化の中核都市である。市制施行後推進せられつゝあるものは、都市計画により道路の整備、改修、市立短期大学の設置、市営住宅、小中学校々舎の建設等市民の前に其の姿を展開し、なかんづく市立短期大学の設置は名実共に文教都市としての貫録を示すに充分であり、全国織物市場に其の名声を馳せる八端織物の名と共に面目躍如たるものがある。

市制施行一年有余の今日郡内文教施設のセンターとして、又田園工業都市として一步一步的確なる歩みを續ける為には都留市民のたゆまざる努力が望まれる。以下我々の先輩が営々として築いた本市の合併前の旧町村の歩んで来た足跡を尋ね、明日の飛躍的發展のしるべとすることにして。

古来谷村町を中心とする一帯は郡内に於ける政治経済、文化の中心にして又附近一帯に生産される絹

## 草

織物甲斐絹は全国的に其の名を知られ、其の優雅な肌ざわりは都人より庶民に至るまでひとしく愛用せられたものであり、その生産地郡内の名と共にまだ想出盡きぬものがある。かくてこのやまかいの街は織物と共に生き発展して来たものである。今星移り月替ると共に甲斐絹は八端、傘地等に移り変つたが以前にまして全国織物市場に確固たる名声を博している。

郷土史甲斐志料集成をひもとくとき谷村町を中心とした沿革を探ねる。(以下甲斐志料集成による)谷村町附近一帯を多良郷と呼び中古田原郷に作るとあり田原とは水田多き原を云い、一郡水田の開けし所此の地に勝れるはなし郷名の起る処知るべしとあり、中古時代既に開田を行つたことがしのばれる。

天文元年壬辰年(紀元1532年)小山田越中守屋村(谷村)へ館を立て都留郡を領し天文10年迄谷村に居住す。此の頃より政治の中心地として発展して来たのである。

天文10年小山田氏滅亡後、徳川の家臣島居彦右衛

門尉元忠へ郡内を給り谷村に居住す。天文18年元忠上総国矢作に移りてより羽柴少将秀勝の領地となり家臣三輪五右衛門近家来りて治む。天文19年始め近家美濃国岐阜に移り、同4月頃より加藤作内光吉これに代り、文祿元年壬辰、光吉朝鮮の役に従ひ美濃国黒野に移る。

文祿2年河野左衛門佐来り治む。文祿3年勝山城を築く。これまでは館のみにて城はなかりしと云う。慶長5年左衛門佐浅野幸長に従つて紀州へ移り木の本に住す。慶長6年島居成次在城し、同8年成次卒し男淡路守相續、同9年忠長卿の事により罪を蒙り出羽国最上に遷る。

寛永10年2月、上州郡馬郡惣社より秋元但馬守秦朝来つて在城す、富朝喬朝相續在城す宝永2年3月秋元氏武州川越に移りてより勝山城は廢城となり徳川氏の直轄領地となり御代官陣屋を置かる。

谷村町は往古一村なりしが、文祿3年浅野左衛門佐檢地の時より上谷村、下谷村の2村に分れ、明治8年1月9日合併して一村谷村となる。

明治29年3月7日町制を施行して谷村町と称する大正11年12月30日上水道竣工、12年2月1日より

給水を開始する。

大正12年8月より町営電気供給事業を開始し、昭和3年8月役場庁舎を新築、現在の市庁舎である。

昭和9年4月公益質屋事業を開始する。

昭和17年4月1日三吉村、開地村を合併人口11,898人となる。

旧三吉村は明治8年9月法能、玉川、戸沢の3村を合併して之に賀字の吉をあて、新村名としたもので、開地村は同年4月小野、能井戸、菅野を併せて文化のひくい土地を開く意を含めて開地村と名付けたものである。

昭和17年11月電気事業を関東配電株式会社に出資す。

昭和29年4月29日町村合併により谷村町、宝村、禾生村、盛里村及び東桂村を合併して市制を施行し、其の名を都留市とし、人口31,017名を擁する山梨県下第4番目の市として新しいスタートを切つたのである。この合併によつて本市は名実共に郡内の政治経済文化の都市として洋々たる前途を約束せられたのである。